

平成29年6月5日、政策秘書課職員との話です。

市西部にお住まいの方から、「就職や進学のために出て行った子ども達が、そのまま戻ってこない」という話をよく聞きます。

みなさんは、子ども達が戻ってくる「ふるさと」は、どんなところだと思いますか。私は、「みどりがあるまち」、「人と人とのつながりがあるまち」ではないかと思っています。

昭和40年代、当時の長久手は、本当に貧しいところでした。

貧しいまちをなんとかしようと、先人達は、区画整理事業といって、地権者から少しずつ土地を提供してもらい、土地の区画を整え、提供してもらった土地を公共用地に充てて、道路や公園等の公共施設を整備してきました。豊かで快適な生活を手に入れるために、自分自身の財産を提供して、まちづくりを行ってきてくださいました。

そうした便利なまちをつくっていく過程の一方で、少しずつ、「みどり」や「人と人とのつながり」を失ってしまいました。



みどりの力

京都市内に築32年の48戸の分譲マンションがあります。

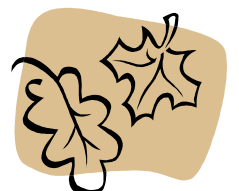
そのマンションは、30年後、50年後、100年後を見据え、将来、子ども達が戻って来たくなるマンションをめざし、入居希望者が集まり、約3年をかけて敷地内の設計に始まり、誰がどこに住むか、管理・運営をどうするかなどを話し合い、造られました。その取り組みの中で、マンションの中庭に入居者で植樹を行いました。植樹した木々は、4階建てのマンションの屋根を越すほどに成長し、今ではちょっとした森になっています。そして、現在の住人のうち、7世帯は、独立後に再びマンションに戻って来た子ども達世代だそうです。

「48戸のマンションだからできたこと」と思われる方もいらっしゃるかもしれませんが、私は、小規模の事例であっても、まちづくりに通じることだと思っています。

みどりには、人や虫など、さまざまな生命が引き付けられます。

みどりのあるところに、人は集まり、戻ってくるのです。

そして、私たちは、みどりという自然を通じ、例えば、枯葉が落



ちるのがわずらわしくてもそれは止められないなど、自分の思い通りにならないことがあることや、多様なものが存在することを学ぶことができます。枯葉が落ちれば、わずらわしいこともあります。多様なもの、わずらわしいものを受入れようとすれば、互いに折り合いをつける必要があります。互いに不寛容ではられないのです。

30年後、50年後に今の子ども達が、「やっぱり長久手に戻りたい」と思えるまちにしていきたいと思います。そのためには、他の自治体にはない、特徴が必要です。その時のキーワードが、本市の基本理念である「つながり」「あんしん」「みどり」なのです。

～市長の話を聞いて～

数年前に本市文化の家で講演を行ってくださった演出家の倉本聰氏は、「酸素と水という人間にとっていちばん必要な、命の必需品というべきものは、森がつくってくれている。これからは葉の時代だ」という話をしてみえたのを思い出しました。

今、児童手当現況届の提出のため、多くの子育て世代の方々にご来庁いただいています。その方々に「2050年の長久手がどうなっていたらいいと思うか」、お聞きしていますが、多くの方が「みどり・自然が残っていたらいいと思う」と答えています。

私は、みどりを意識し始めてから、旅行等で出掛けた先の街路樹が気になるようになりました。みどりが豊かなまちは、どこか空気がのんびりと流れているようで、雰囲気まで「豊か」に見えます。みなさんも、一度、そうした目で旅行をしてみてはいかがでしょうか？